ピーテル・ブリューゲル(父)作《死の勝利》
―コピー作品との比較に基づく祝宴のモチーフについての一考察―

九州大学大学院　香月比呂

16 世紀ネーデルラントの画家ピーテル・ブリューゲル（以下ピーテル 1 世）の《死の勝利》(1562 年頃、プラド美術館蔵)は、荒涼とした大地を背景に、死の軍勢と生者との壮絶な争いを描き出した作品である。本発表は、ピーテル 1 世の 2 人の息子たちによる《死の勝利》のコピー作品を取り上げ、オリジナル作品との比較を通してその制作過程を明らかにするとともに、祝宴の場面に描かれた恋人たちのモチーフが作品の鑑賞時に果たした機能について考察するものである。

ピーテル 1 世の 2 人の息子たちは、ともに長じて画家となったことが知られている。長男のピーテル 2 世は、その生涯に 1000 点余りの父作品のコピーを制作し、静物画や風景画で知られる次男のヤン 1 世も、20 代の頃にはやはり数点のコピーを制作した。現存するこれら膨大な数のコピーから、ピーテル 1 世の作品が画家の死後もなお高い人気を誇っていたことが窺われる。本発表で取り上げる《死の勝利》のコピーも、おそらくこのような作品需要に応じて制作されたものであろう。

クリスティーナ・カリーとドミニク・アラートは、著書 *The Brueg(H)el phenomenon* (2012) において、ピーテル 1 世のオリジナル作品及びピーテル 2 世のコピー作品の科学調査をおこない、両者の比較分析に基づいてコピーの制作手法を明らかにした。本発表ではまずこれらの先行研究に鑑み、ヤン 1 世、ピーテル 2 世およびその工房の作と考えられている《死の勝利》の 3 点のコピーが、ピーテル 1 世の残した実物大の下絵ないしは小規模な習作を用いて制作された可能性を示す。

また次に、本発表で取り上げる 3 点のコピーの内の 2 点において、画面右前景に描かれた祝宴のモチーフに、興味深い改変が施されていることに注目する。この 2 点のコピーはオリジナルにほぼ忠実に制作されているものの、オリジナルの祝宴の場面に描かれた恋人たちの 16 世紀的ファッションは、それぞれのコピーが制作された 17 世紀前後に流行したものへとアップデートされている。すなわち、2 人の息子たちはピーテル 1 世の描いたモチーフを直接コピーしているのではなく、むしろ「同時代的な衣装に身を包んだ恋人たちを描く」という意図を模倣しているのである。発表者はこのような操作がおこなわれた理由の 1 つとして、「死の勝利」という非現実的な絵画主題をより現実的なものとして観者に想起させるという目的があったのではないかと考える。

従来、ピーテル 1 世の描いた恋人たちのモチーフに関する議論は、寓意的、教訓的側面からの解釈に重点が置かれてきた。本発表では画家がこのモチーフに意図した機能（あるいは当時の観者が鑑賞時に得た効果）について、今日の観者よりも時代的、文化的に近い環境にあった息子たちのコピー作品から遡行的に考察することにより、本作品研究に新たな視座を示したいと考える。